

日本近代文学研究の継承と可能性

——情報化時代のなかで求められるもの——

野中 潤

一、漱石研究の不可能性

昨秋、二松学舎大学の創立一三〇周年記念国文学シンポジウム「漱石研究の継承と可能性」が開催された。三回連続のシンポジウムの第一回は、内田道雄、畑有三、平岡敏夫の三氏によるもので「近代文学研究の展開と『ころろ』と題されて十月十三日に行われ、続く第二回は「教科書と漱石」という課題を掲げて十一月二十四日に行われた。夏目漱石の専門家である藤井淑禎、佐藤泉の両氏のあとに、門外漢とも言える私がパネラーとして発表をしたのだが、その際に国立国会図書館の「雑誌記事索引検索」というシステムを使って

調べた漱石関係の文献一覧を、B4判の用紙を二つ折りにしたレジュメの表紙として掲げた。雑誌の記事として掲載された文献のタイトルに「漱石」という文字が含まれているものを、二〇〇五年からシンポジウムが開催された二〇〇七年十一月までに限って検索し、そのまま羅列したものである。三年近くの間に発表された文献として国会図書館の検索システムでリストアップされたものは全部で二五九編。書誌情報を含む検索結果をレジュメの表紙としてB5サイズの用紙に割り付けるためには、行間と字間を極限まで狭め、四・八ポイントという極めて小さな文字で印字せざるを得なかった。本誌のルビのポイントが5ポイ

ントであるから、それよりも小さな文字で印字したことになる。こうした表紙を作成したのは、文献数の多さを視覚的に明示しようと考えたからで、連続シンポジウムのテーマであった「漱石研究の継承と可能性」という問題に対する私なりの応答のつもりだった。

二五九編という数は十一月二十日現在の集計だったので、今年に入ってから改めて集計し直してみたところ、「漱石」という単語を含む表題の雑誌収録文献の総数は三年間で二八二編に及んでいることがわかった。しかも『《世間》のレックスン—学校という《世間》と『坊つちゃん』』とか『三四郎』の都市体験』などのように、タイトルに「漱石」という文字が使われていない文献は今回の検索方法ではリストアップされない。また、国会図書館の「雑誌記事索引検索」の対象になっていない文献も、相当数あるはずである。ちなみに、同じシステムを使って二〇〇八年三月までの文献総数を調べてみたところ、「漱石」という語を表題に含む記事だけでも四〇一〇編に達していることがわかった。

東京学芸大学の学部生として学んでいた

頃、卒業論文を書くなら、取りあがる作家を早く選び、まずは全集を買って全巻を読破するように指導された。全集の読破と並行して、その作家に関する先行文献を、あらゆる手段で入手することも必須だった。学燈社の『國文學』や至文堂の『解釈と鑑賞』などの特集号で当該作家の参考文献一覧を確認し、国文学年鑑なども活用しながら必要な文献を大学の研究室や図書館で入手する。それだけでは集めきれない文献は、国会図書館や近代文学館などをまわって一枚五十円というよきな金額でコピーしてまわり、自宅に持ち帰って読破した。こうした準備作業を経てようやく、先行研究をふまえて独自の観点から立論することが可能になるわけである。

「漱石研究」の世界でそんなことが果たして可能だろうか。

年間百本に達するようなペースで量産され続けている雑誌掲載の文献に加え、当然のことながら単行本も読まなくてはならない。試みに現在市場に出回っている新刊本の漱石関連書籍を調べてみると、タイトルに「漱石」という語を含む本だけでも、『漱石―母に愛され

なかつた子』(三浦雅士著／岩波書店・二〇〇八年四月)を筆頭になんと二二〇八冊も存在する。そのうちの三〇八件は『漱石書簡集』のような本で、著作者は漱石自身だが、それらを除いてもざっと九〇〇冊もの新刊本が存在することになる⁽¹⁾。しかも、このリストの

中には、片岡良一の『夏目漱石の作品』(厚文社・一九五五年八月)や越智治雄の『漱石私論』(角川書店・一九七一年六月)などのような古典的な研究書は含まれていない。なかには『夏目漱石―人生を愉快に生きるための「悩み力」』(斎藤孝著／大和書房・二〇〇六年八月)のように、研究的な価値があるかどうか疑わしいタイトルの書物も含まれている

とは言え、渉猟すべき書籍の膨大さは否定できない。四年間で卒業しようという大学生が、いったいどうすればこれらの文献を読破できるのだろうか。いや、修士課程や博士課程まで進んだとしても、すべての文献をしっかりと読み込んで、先行研究の蓄積の上に自分独自の研究を積み上げていくという芸当は、もはやきわめて困難になってしまっている。「漱石研究の継承と可能性」は、すでに情報の海の

中で溺死同様の状態にあるのだ。

二、日本近代文学研究の不可能性

膨大な文献の海の中で漱石研究の継承が極めて困難になっているのなら、作家研究を部分集合として含むはずの「日本近代文学研究」の全体像を把握することは、もはや不可能であると言わざるを得ない。

一つには、研究書の出版点数が増加しているという問題がある。活版印刷の時代が終わりと、DTP(デスク・トップ・パブリッシング)が普及した九〇年代以降、出版社は出版点数を増やすことで収益を確保しようとしている。私のような中高一貫校の教員が、笠間書院という研究書専門の書肆から「横光利一と敗戦

後文学」(二〇〇五年三月)を公刊できたのも、このような状況と無関係ではない。たとえば二〇〇五年に発行された『日本近代文学』第72集と第73集に掲載された「執筆ノート」で取り上げられた日本近代文学会の会員の研究書は、私のものを含めて合計で六八冊に及んでいる。投稿論文の査読という重要な仕

事を抱えた学会誌の編集委員が、献本される大量の研究書をもてあまし、著者自身に本の内容を紹介させる「執筆ノート」という方法をとらざるを得なくなつてしまつたのも無理もない話である。ことほどさように、「近代文学研究」の動向をフォローし続けるという仕事は、困難をきわめたものになつてしまつているのである。

公刊される研究書が増加している背景には、出版業界の事情とは別に、文部科学省の政策によつて課程博士が増加しているという問題も挙げられる。学位を授与されたら一定期間内に公刊が義務づけられているために、博士論文が次々に書籍化されているのである。二〇〇七年に「文学」の学位を授与された博士論文は三〇六編あり、その中で表題から日本近代文学関係であると判断できるものだけでも十三編を数える。「学術」の学位で日本近代文学に関わるものや「文学」の学位でも学際的な研究であるものを加えれば、二〇〇七年の一年間で学位を授与された日本近代文学に関わる博士論文の数はさらに増えるはずである。試みに「文学」の学位のも

のに限つて例示してみれば、二宮智之『夏目漱石研究—小品の独自性と可能性』、高橋奈保子『近代文人としての芥川龍之介—芸術と風流の間で』、申英蘭『郁達夫と日本文学の関係試論』、田中葵『遠藤周作文学作品論—その文学的特質について』、中谷いずみ『近代日本における綴方と文学—豊田正子を中心に』、『姜宇源庸』へ私小説の成立—日本の「私」と「社会」などがあげられる。十三編の中には小平麻衣子『近代日本における文学・演劇とジェンダー—明治十年代から大正中期まで』や生方智子『日本近代文学における無意識の構成—明治四十年代のへ小説を視座として』のように論文博士(乙号)として学位を授与されたものも含まれているが、課程博士(甲号)の増加にともなつて毎年多くの博士論文が公刊されていく状況はしばらく続くことになるだろう。

これらに加えて、学会誌掲載論文の情報量の増加も顕著なものになつている。たとえば、『日本近代文学』の場合、創刊された一九六〇年代から九〇年代半ばまではせいぜい二百ページぐらいの厚さで、百五十ページを切るも

のも少なくないのだが、最近では三百ページを超えるのが当たり前になつていて、二〇〇六年五月に発行された第七四集などは五百ページを超える厚さである。公式ウェブサイトによると、日本近代文学学会の会員は二千名ほどいるようだが、いったいそのうちの何人が全部の論文に目を通していただろうか。

このほかにも日本近代文学研究の動向を把握するために目を通しておくべき逐次刊行物は、枚挙にいとまがない。『昭和文学研究』や『日本文学』などの他に、国文学関係の商業雑誌、大学別の学会誌や紀要の類、作家別の研究会の機関誌などを含めれば、年間百冊をはるかに超えるだろう。玉石混淆かもしれないが、「日本近代文学研究」の最新の動向をしっかりとフォローするのなら、これらの刊行物への目配りも欠かせない。しかし卒業論文や修士論文の査読や入試問題の作成など、研究以外のさまざまな職務をこなさなくてはならない大学の教員が、教育職としての責務を誠実に果たしつつ、自らが専門とする領域で発表される膨大な文献を涉猟することが果たして可能だろうか。

このような観点からすると、「日本近代文学研究」の全体像をしつかり見つけ続けている研究者は、もはやこの日本には一人もいなくなつてしまつたのではないかと思われる。日本近代文学会の大会が「A会場」、「B会場」というような複数会場で行われているという昨今の状況も、「日本近代文学研究」の全体像を見渡す視座がもはやどこにも存在していないことを象徴する事態なのかもしれない。

しかしなんとか全体を見通せる視座を確保しなければ、研究を成立させることはできない。そのためには「試験管の中」とも言うべき操作可能なフィールドを仮構するしかないだろう。テキスト論、国民国家論、フェミニズム、ポストコロニアリズムなどの流行は、こうした事態によつて惹起されたものだったのかもしれない。一九八〇年代に、精緻な実証を積み上げて作家論や作品論を展開していた旧世代の研究者を、「テキストの背後に作者はいない」と切つて捨てた新しい世代の研究者が出現した。彼らは、日々増え続ける膨大な文献を涉猟しなくてはならない既成の研究システムの中で年長者に勝つことよりも、ルール変更によつて

一気に価値の転換を図るという戦略を選択したのだ。言い換えれば、ルールを刷新することによつて、先行文献を網羅的に全部読まなくても済むような新しい試験管を作り出したのである。半生をかけて積み上げた研究によつてようやく「文学博士」になれるという秩序がくずれ始め、「課程博士」が誕生したのも、こうしたルール変更が行われたのと同様時期のことだった。

三、学術情報リポジトリについて

研究論文にウェブ上の情報を引用したり援用したりすることは、研究領域によつて若干の違いがあるかもしれないが、まだまだ市民権を得ているとは言えない。紙媒体のものに比べ、物としての確からしさが感じられないというような感覚的な問題もあるだろう。いつの間にか内容が修正されたり改訂されたりしてしまう可能性があるという現実的な問題もあるだろう。さらには、「Not Found」指定された「巴」は存在しません」というような表示が出るだけで、あつたはずのウェブページが

参照不可能になってしまう場合すら珍しくない。ウェブ上に公開されているテキストを引用することが研究論文の世界で認められないのは、当然のことだと言える。ただ、ウェブを参照することを禁止にすることは、紙媒体という閉鎖系の中に「日本近代文学研究」を囲い込むためのものになっているという側面も否定できない。たとえば「漱石」という語でインターネットを検索すると、およそ二四〇万ものページがヒットする（二〇〇八年三月末現在）。もちろんウェブ上に存在する「漱石」という語を含むテキストの大半が研究的には愚にも付かないものであるに違いないが、紙媒体に発表されている文献と同程度の価値を持つものが皆無であると断定するのも早計である。また一方で、紙媒体に発表した論文を、あらためてウェブ上に公開するという動きも顕著になつてきている。研究者個人が作っているホームページで論文を公開しているものだけでも、渡辺芳紀氏の「中央大学文学部文学科国文学専攻 渡部芳紀研究室」、日比嘉高氏の「日比嘉高研究室」、根岸泰子氏の「根岸泰子のホームページ」、高橋孝次の「イナガキ・タル

ホ・スタディーズ」など、いくつものサイトが存在する。研究組織によるものでは、広島大学の近代文学研究会が発行している『近代文学試論』が一九六六年の創刊号から最新号までのすべての号をウェブ上にアップしているのが注目される。また、本誌のバックナンバーも、現代文学史研究所のホームページで公開されている。ただし『近代文学試論』は誌面をそのまま画像として公開するPDFファイル形式での公開であるし、『現代文学史研究』の場合は今ところごく一部の論文に限った公開である。

しかもインデックスや検索窓などをつけてアクセスしやすい状態で公開しているわけではないので、データベースとしては十分に機能していないのが実情である。これは研究者個人が公開している論文についても当てはまることで、「日本近代文学」に関わる論文を、本文の内容を含めて横断的に検索できるようにしなければ、特定の研究テーマに関わる学術情報を効率的に収集することはできない。

こうした中で注目されるのは、主として全国の国公立大学で整備されつつある「学術情報リポジトリ」である。

これは国立情報学研究所が二〇〇二年十月から行ってきた「メタデータ・データベース共同構築事業」によって充実が図られてきたものである。今では国会図書館の「雑誌記事索引検索」のようにタイトルや掲載誌、発表年月日などのメタデータを集積するだけでなく、本文を含めた学術情報の蓄積・保存と発信を可能にするものへと発展しつつある。二〇〇八年一月現在、国内七十二の機関リポジトリが構築されているという。

たとえば、「東京大学学術機関レポジトリ」の概要は、以下のようなものである。

学術機関リポジトリ(Institutional Repositories)とは、大学等の学術機関で生産された、さまざまな研究成果を電子的な形態で集中的に蓄積・保存し、学内外に公開することを目的としたインターネット上の発信拠点(サーバ)です。

東京大学では、本学で生み出される世界水準の研究成果の国際的な流通、研究成果のvisibilityと速報性の向上、知識群のOpen Access化、さらに学術と社会の交差

を図りつつ、国際的な学術交流に寄与することを目的として、2009年4月に「東京大学学術機関リポジトリ(UJ Repository)」を公開し、サービスを開始しました。

同様のリポジトリは、北海道大学、東北大学、筑波大学、東京学芸大学、横浜国立大学、信州大学、名古屋大学、京都大学、大阪大学、九州大学、琉球大学などの国公立大学を中心に、早稲田大学、慶応大学、同志社大学などの私立大学や、日本貿易振興機構アジア経済研究所のような研究機関で稼働中である。世界のどこからでも容易にアクセス可能な状態で学術情報が公開されているわけで、研究活動を振興していく上できわめて有益なデータベースになる可能性を秘めている。たとえば、無料でウェブ上に公開された論文の被引用率は、そうでない論文の五・六倍となったという調査報告もあるらしい(2)。独立行政法人化にとめない独自の研究をいかに世界に発信していくかが問われる時代に入ったことで、各大学は学術情報を活用するための重要な手段として、学術情報リポジトリのい

つそのの充実を図っていくことになるだろう。

四、ウェブ時代の日本近代文学研究

大きな可能性を秘めている学術情報リポジトリだが、まだまだ課題も多い。たとえば、これのリポジトリも、大学に所属している研究者の研究成果を大学単位で公開しているだけにとどまっているという点があげられる。リポジトリを持っている大学や研究機関に所属していない研究者は、このシステムを使って論文を公開することができないのだ。また、大学単位のリポジトリにアクセスした場合、その大学に所属している研究者の研究情報しか収集することができないのである。

こうした状況の中で二〇〇七年度から始まったのが、国立情報学研究所による「学術機関リポジトリ構築連携支援事業」である。これは、各大学のリポジトリを横断的に検索するシステムの構築を目指したもので、学術情報の集積と活用という意味では画期的な試みである。

この事業の中で注目されるのは、二〇〇四

年八月から試行運用を開始していたNII学術情報ナビゲーター「CZIII(サイニイ)」である。これは、国内二八四の学協会から許諾を得て、紙媒体の学協会誌約千タイトルに掲載された約三〇〇万件の論文情報を公開している。たとえば、「CZIII(サイニイ)」を使、「漱石」を検索語として本文データが入手出来る二〇〇五年以降の文献を探してみると、吳少華氏の「漱石作品における人称代名詞(口頭発表・午前の部/日本語学会二〇〇六年度秋季大会研究発表会発表要旨)」「日本語の研究」(二〇〇七年四月)を筆頭に全部で四六編がリストアップされる。これらは、リストアップされたタイトルをクリックすると即座に論文の本文を入手することができる。「漱石」関係のもので「CZIII(サイニイ)」を使って本文を入手できるのは、二〇〇四年以前のものまで含めれば二六三編に達する。これは、紙媒体で公表されている文献のごく一部に過ぎないが、システムに登録する学協会が増え、登録論文の数が多くなれば、大きな可能性を持ったシステムだと言えるだろう。

残念ながら今のところ人文科学系の学協

会で登録をしているのは、全国大学国語教育学会、日本文化人類学会、日本ロシア文学会、日本笑ひ学会、早稲田大学史学会など六三に過ぎず、その中に国文学系の学会は含まれていない。ウェブ上で論文を公開してしまうと、学会に所属する意味がなくなってしまう、会員数が減ってしまうという問題がネックになつているのかもしれない。しかし学術情報は読まなければならない存在する意味がない。「CZIII(サイニイ)」で学術情報を公開する場合、ユーザに課金することが可能なシステムになつているが、営利企業にとつて有益な情報を含む自然科学系の学術論文ならいざ知らず、国文学系の学術情報に代価を求めるといやり方は、時代に合致したものとは言えないのではないだろうか。ウェブ時代の基本は、無料で公開することによってアクセスしやすい条件を整え、利用者を増大させることによつて価値を創出するところにある。パソコンはインターネットにつながなければ「ただの箱に過ぎない」という話がある。学術情報も、閉ざされた学術団体の中の紙媒体に発表されるだけで「ただの紙切れに過ぎない」という時代に

突入しつつあるのだ。そういう意味で考える
と、「CINii(サイニー)」のシステムは、全体とし
てまだまだ旧弊である。たとえば、『現代文学
史研究』掲載論文を「CINii(サイニー)」で公開
するには登録手数料が必要なのだが、最も金
額の安い「常勤の教員・研究者数100人以
下」の「アカデミック料金」の場合で、年額五万
二千五百円である。会員数が二千人を超え
る日本近代文学会のような学術団体になる
と、法人登録をするのに年間百五十万円の費
用がかかることになるようだ。アカデミック会
員ではなく、通常会員ということになれば、
年間の登録料は三百五十万円にも及ぶ。さ
まざまなサービスを無料で提供するのが当た
り前になっているウェブの世界で、公的な機関
が国民に対してこれだけの代価を求めるのは
時代錯誤と言うしかない。旧弊な社会資本の
整備に汲々としている政策的な錯誤のしわ寄
せが、こうしたところにも影を落としていると
いうことなのかもしれないが、知的財産のパブ
リック・ドメイン化(公有化)という観点から言
えば、大きな問題である。

「CINii(サイニー)」以外にも、大学図書館

等の図書・雑誌を検索できる「Webcat Plus」
や科学研究費補助金による研究成果のデー
タベース「KAKEN」、国内の学会・研究者・図
書館等が作成している学術的なデータベース
を横断的に検索できる「学術研究データベース
・リポジトリ」などが既に整備されていて、こ
れらはすべて国立情報学研究所のNII学術
コンテンツポータル「GeZi(ジーニー)」によっ
て統括されている。つまり、「GeZi(ジーニ
ー)」にアクセスすれば、上記四つのデータベ
ースをまとめて検索することも可能なのだ。

しかし、インターネット図書館「青空文庫」
のように研究者個人が無料で自由に研究成
果をアップロードすることはできない。さら
にインターネット百科事典「ウィキペディア」の
ように論文の内容についての議論や論文内容
の改訂が随時行われ、しかもそれらの過程が
つねに参照可能な形で公開されているわけ
もない。こうした条件が整えぬことができるか
どうか、研究者個人のパソコンや学術書を
発行している印刷所などに膨大なデジタル情
報を眠らせている「日本近代文学研究」の将
来を大きく変えることになるだろうことは間

違いないところだろう。

【注】

1 国内におけるインターネット書店の草分
け「セブンアンドワイ株式会社」の販売サイ
トで「詳細検索」([http://andy.yahoo.co.jp
/books/search](http://andy.yahoo.co.jp/books/search))を使って調査。校正時に確
認した二〇〇八年五月一日現在の数字。

2 広島大学の「学術情報リポジトリ」の中
にその特徴を説明したページがあり、「大学に
とつてのメリット」として、「説明責任の遂
行、学術情報の一元的管理、大学のブラン
ド力の向上」の三点が掲げられ、「研究者に
とつてのメリット」として、「新たな研究成果
発信ルート、研究成果のショーウィンドウ、
論文の被引用率アップ」の三点が掲げられ
ている。このうち論文の被引用率アップに関
する調査報告として以下の文献が注記さ
れている。Stevan Harnad, Comparing the
Impact of Open Access (OA) vs. Non-OA
Articles in the Same Journals. D-Lib
Magazine, v.10, no.6(June 2004)

(のなか・じゅん)